



医療手薄の地域 診療車走る

医師が限られ、高齢化と人口減少が進む山間地や離島で、どうやって医療アクセスを確保していくのか——。そんな課題に対する取り組みが各地でオンライン技術も使い始まっている。狙うのは、質を下げずに患者の負担を減らすサービスの提供だ。

柴三郎号からリモートで診察

小国町で1月末、オンライン診療車「柴三郎号」のお披露目式があった。7月から新千円札の肖像画になる同町出身の細菌学者、北里柴三郎博士にちなむ名前をつけた診療車は、小国公立病院が導入。小国町と隣の南小国町での移動診療に使う。

大分県との境の山間部にある同町は、高齢化率が4割を超える。面積では大阪市より広いが、入院機能がある病院は同院だけ。クリニックも昨夏一つ減って二つになり、閉院した民間のクリニックを同院が「サテライト診療所」として引き継いだ。

地域に公共交通機関は少なく、住民がタクシーで



オンライン診療車の中で患者役として診療のデモンストレーションをする北里柴三郎記念館の北里英郎館長（右）＝小国町

30分かけて通院しなければいけない場所もある。テレビ会議システムがついたオンライン診療車が来たことによって、サテライト診療所にいる医師がリモートで診察することができるようになった。看護師らが診療車に乗って地域の公民館などに赴く。

車内には血圧計や体重計などに加え、鹿児島市に本社を置くAMI社が開発した、心音・心電図を遠隔で調べることができる「超聴診器」なども備わっている。

対象の患者は、小国公立病院やサテライト診療所に高血圧などの慢性疾患で通っている人で、1日最大7人程度を予定している。

小国公立病院の片岡恵一郎・病院事業管理者は



薩摩川内市で導入する予定の診療車のイメージ＝川内市医師会提供

市や川内市医師会などが、病院や介護事業所、薬局などでばらばらに管理されていた患者のデータを共有できるネットワークを整備した。看護師が乗った診療車が離島などに赴き、診療所の医師による診察を遠隔で受けられるサービスも24年度はじめにはスタートする予定だ。

川内市医師会の新盛和久事務局長は「バスもなかなかない場所もある。出かけていって診察できれば」と話した。

宮崎県も「必要なものと認識」

こうした、オンライン診療車を使って離れた場所にも医療サービスを提供する「医療MaaS」は訪問診療に比べて医師の移動時間も減らせ、交通の便が限られた地域で広がっていく。

山が深く「無医地区」も多い宮崎県では医療の確保のため、医師・看護師の訪問診療や出張診療所などで対応してきた。

デジタル技術を使った医療支援について宮崎県医療政策課は「必要なものと認識している。対応策のひとつとして、自治体や医療機関と相談しつつ考えたい」。策定中の医療計画の素案では、「へき地公立医療機関等でオンライン診療を実施できる医療機関」の数を、22年度のゼロから、29年度までに17にする目標を掲げている。（杉浦奈実）

「少子高齢化が進み、移動能力が下がる中でも幸せに生きていくのを支援するためのツールになれば。日本全体のモデルになればと思う」と話した。

県内では小国地域に先んじて、八代市坂本町でも2022年末からオンライン診療車の実証が始まっている。坂本町は20年の豪雨災害で大きな被害を受け、医療機関も被災した。

患者データ共有できる仕組み

人口約4千人の離島・甌島を抱える鹿児島県薩摩川内市でも、デジタル技術を使った診療のしくみが動き始めている。



オンライン診療車「柴三郎号」＝小国町